近世・近現代部会 活動報告

江戸時代や明治時代などの資料は、紙に書かれた古文書だけでなく、石造物、考古遺物など、その形態は様々です。その中でも、木製の資料である「高札」をご紹介します。

高札は法令や禁止事項などを木の板に墨書したもので、多くの人の目に触れるよう、町や村の辻などの「高札場」に掲示されました。今回取り上げる高札は、「告諭の高札」です。これは、明治2年（1869）に品川県に属していた武蔵野新田12ヶ村が、恐慌予防・窮民救済のため品川県によって設置された社倉制度の免除を求め、県庁へ嘆願の訴えを起こした「御門訴事件」に関するものです。県側による鎮圧で、多数の犠牲者・逮捕者を出しました。近隣自治体でも同様の高札が見つかっていますが、国分寺市では現在一点のみが確認されています。

編さん室ではこの「告諭の高札」の撮影を行いました。既に確認されている資料ですが、新たに撮影したことで、劣化で墨が剥がれた文字も判読できるようになりました。

（木本 和志）

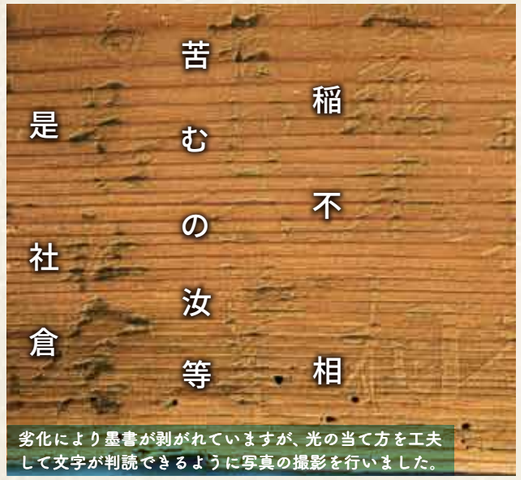
資料撮影の様子

明治3年（1870）正月　告諭の高札（市教育委員会蔵）

資料の情報をお持ちではないですか？

充実した市史を作るために、国分寺に関係のある資料や記憶・情報などを探しています。写真・古文書などの資料の閲覧、撮影、調査などにご協力いただける方、昔のお話を聞かせていただける方は、市史編さん室までご連絡ください。また、「これは資料かな？」と思った時もご連絡ください。

市民の方よりお借りした地図（池谷都瑠雄家文書）



上写真□部分拡大

国分寺市史編さん News Letter　第4号　令和8年（2026）3月31日発行
編集・発行：国分寺市教育委員会市史編さん室
〒185-0034　東京都国分寺市光町1-46-8　ひかりプラザ5階　電話：042-571-7815

国分寺市史編さん

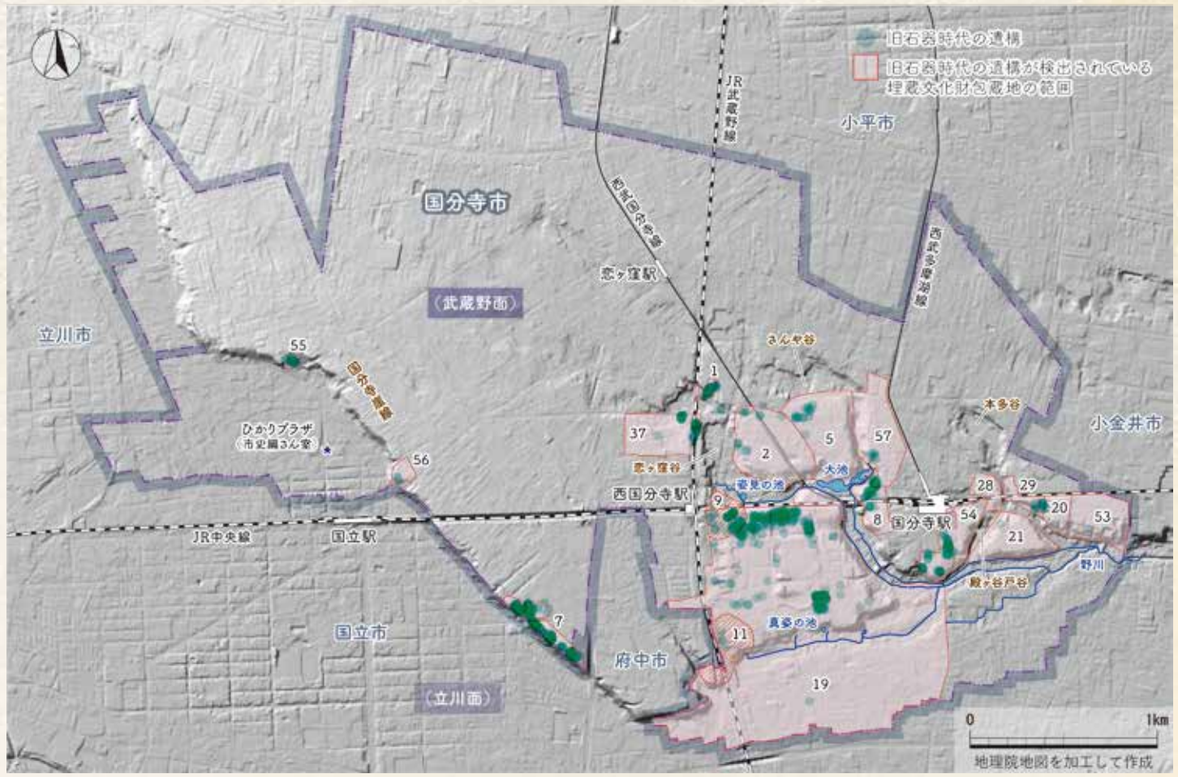
News Letter

2026
3月31日
発行
Vol.04

原始・古代・中世部会 活動報告

旧石器時代の国分寺市域

原始・古代・中世部会では、過去の発掘調査報告書をもとに遺物等の再確認をするとともに、詳細が明らかとなっていない遺跡や調査地点について、遺物や図面の整理・図化・分析などを行っています。ここでは、令和6・7年度に主に整理を進めた国分寺崖線西側エリアに位置する遺跡と遺物、その整理作業の進捗について紹介します。



市域の旧石器時代の遺構分布図

■国分寺市域における旧石器人の痕跡

国分寺市は武蔵野台地上に位置し、古多摩川が削り取った国分寺崖線（ハケ）を境に、崖線上の武蔵野面、崖線下の立川面に地形が大きく分かれます。市内の旧石器時代の遺跡は、この崖線や恋ヶ窪・さんや、本多・殿ヶ谷戸の谷沿いに分布しています。上の図からも、特に崖上の縁などの見晴らしがよく湧水や野川などの水を得やすい場所に生活の痕跡が集中していることが分かります。旧石器時代には、地面を掘りこんで柱を建てる竪穴住居のような遺構は全国的にもほとんど見つかっていません。石器を製作していた場所と考えられる石器集中地点や、調理などをして被熱した川原石が集中する礫群などの遺構から、生活拠点やその暮らしぶりを知ることができます。

遺跡No.	遺跡名	遺跡No.	遺跡名
1	熊ノ郷遺跡	21	殿ヶ谷戸遺跡
2	恋ヶ窪遺跡	28	本町（国分寺村石器時代）遺跡
5	羽根沢遺跡	29	No.29遺跡
7	多摩蘭坂遺跡	37	No.37遺跡
8	花沢西遺跡	53	東京経済大学構内遺跡
9	日影山遺跡	54	花沢東遺跡
11	多喜窪遺跡	55	光町遺跡
19	武蔵国分寺跡	56	No.56遺跡
20	殿ヶ谷戸北遺跡	57	恋ヶ窪東遺跡

光町遺跡（No.55）　所在地：光町3丁目14・16～18付近

国分寺崖線最西端の旧石器時代の遺跡です。稲荷神社の五差路の崖線傾斜面から崖線上面に立地しています。

立川ローム第Ⅳ層（ハードローム）の下半部（およそ2万6千年～2万2千年前）を中心に、礫群や遺物集中地点が検出されました。崖線上に遺構が多く検出されますが、急斜面では遺構・遺物が検出されないため、旧石器人が崖線の際を好んで生活していたことが伺えます。

▲光町遺跡礫群の出土状況

川原石を使って調理をしていた痕跡。焼けた石に肉などをのせたり、葉などでくるんだ食材を焚火の中に入れて蒸し焼きにしていました。

◀光町遺跡出土の叩き石（上）・ナイフ形石器（下）（写真と3D計測による実測図）

ナイフ形石器は槍や矢の先端に使われた狩りの道具で、叩き石は石を打ち欠いて石器を作ったり、木の実を割る等に用いた石器。3D計測データを活用することで、石器の微細な加工や剥離、使用痕跡などが見やすくなります。

No.56遺跡（No.56）　所在地：光町1丁目1～3・5付近

崖線の西側にある旧石器時代の遺跡で、国立駅を北東に進んだ坂の上に立地しています。立川ローム第Ⅳ層（ハードローム）上半部（およそ2万2千年～1万8千年前）で大量の石器が一箇所にまとまって出土し、なかでも槍先型尖頭器が多く出土しています。これら尖頭器とともに剥片も多く出土しており、この遺跡は石器の製作跡であった可能性があります。

市域の西側では、旧石器時代の地層まで深く掘削行為がおよぶ開発が少ないこともあり、発掘調査はあまり行われていないため、旧石器時代の様相が市域東部ほど明らかになっていません。光町遺跡と本遺跡の詳細を検討することで、崖線沿いの旧石器時代の様子がより明らかになると考え、市史の編さんにおいて、整理・調査を進めています。

No.56遺跡出土の縦長剥片（写真と3D計測による実測図）▲

原石（石核）を打ち欠いて剥ぎ取った縦長の薄い石のかけら。この石器素材に細かい加工を施して、ナイフ形石器や尖頭器などを作り出します。

▲No.56遺跡出土の槍先形尖頭器（写真）

槍の先に括りつけて使う石器。過去の整理作業において石器に貼り付けたテープなどを、ぬるま湯や薬品で丁寧に取り除き、図化を行っています。

多摩蘭坂遺跡（No.7）　所在地：内藤1丁目1・2・5・8～10、2丁目1・2・11付近

国立市・府中市境の崖線沿いに立地し、立川ローム第Ⅹ層（およそ3万8千年前）～立川ローム第Ⅲ層（ソフトローム、およそ1万8千年～1万6千年前）まで、遺構と遺物が連綿と出土する市内最古で最大規模の旧石器時代の遺跡です。

多摩蘭坂遺跡の過去15回の発掘調査のうち、昭和57・58年（1982・1983）に行った第2次調査は、本遺跡を検討するうえで重要な調査地点です。旧市史に概要が掲載されているのみであるため、現在3D計測をして出土遺物の図化を進めています。今回の市史で詳細な調査・研究を行い、これまでの発掘調査成果と合わせて本遺跡の全体像を検討します。

▲第2次調査区全景（西から）

右側のフェンスの先が崖線。崖線上の際まで遺跡が広がっています。

▲多摩蘭坂遺跡第2次調査出土の角錐状石器（左）とナイフ形石器（右）（写真と3D計測による実測図）

立川ローム第Ⅳ層（ハードローム、およそ2万6千年～1万8千年前）に、ナイフ形石器などが集中して見つかりました。角錐状石器は先端を鋭く加工し、厚みのある胴部を棒の先に取り付けて槍として使用しました。石材のメノウは、主に現在の茨城県などが産地で、硬度が高い石です。頑丈で長持ちするよう遠方からメノウを入手していた様子が伺えます。

（木村 遊）

令和8年（2026）1月24日（土）、東京経済大学と共催で、現代市制部会の部会長・専門員5名による歴史講演会を開催しました。以下では、各講師の講演概要を会場風景とともにご紹介します。

写真：岩垂 英都氏 撮影

都市の自画像　―自治体現代史の視点と手がかり―

昭和39年（1964）の市制施行以降、人口は約2.5倍、世帯数は約4.27倍に増加し、町の様子も大きく変化しました。この60年の変貌を探る現代市制部会の活動を紹介しつつ、様々な立場や世代の市民の方々と次の国分寺を共創していくために、拠りどころとなるような市史・現代市制編をつくりたいという目標を話しました。

部会長：羽貝 正美 氏

国分寺と鉄道 ―「貨物から旅客へ」、「国分寺駅の地位向上」の視点から―

専門員：前田 成東 氏

昭和48年（1973）に武蔵野線が開通し、西国分寺駅が開業しました。開業当初の武蔵野線は、貨物線としての性格が強かったものの、旅客需要が拡大すると、徐々に列車本数が増加しました。

また、国分寺駅では特別快速列車が停車するようになり、利便性が大幅に向上します。同時期には駅ビルも整備され、商業の拠点としても地位が上昇したことを紹介しました。

国分寺駅前商店街の形成過程と各商店の記録・記憶について

明治22年（1889）に開業した国分寺駅とともに歩んできた国分寺駅前商店街の発展過程や、商店会組織の変遷などを紹介。また、写真等の記録とあわせて、地域の人びとが駅前商店街の思い出を共有することで、記憶を記録化していくことの必要性を語りました。

専門員：米村 創 氏

「女性」「家族」「生活」という視点から市制60年の歩みを考える

専門員：杉田 孝夫 氏

この60年の間に女性を取り巻く環境は大きく変化し、政府や自治体の女性政策への取り組みも変わりました。その変化とともに、社会の個人化も進みました。国分寺市誕生からの60年を、社会の個人化と女性の社会進出という視点から振り返ることで、現代日本のコミュニティと生活における課題と展望が得られるのではないかとの見通しを述べました。

暮らしやすい町としての国分寺　―市史の一つの役割―

暮らしやすい町の姿として、散歩を楽しめるという要素を提案。その条件として、緑が残っており、気軽に立ち寄れる古本屋や独立系の喫茶店があることだという思いを語りました。

また、新たな市史は、大きな歴史の流れのなかで地域を捉えることで、日々の暮らしの中で感じる町の姿と、その背景にあるこれまでの歩みを学べるものにしたいと結びました。

専門員：米山 高生 氏

講演会で参加者よりいただいた多くのご質問を参考にしながら、多くの方に親しまれる市史や現代市制編とすべく、今後も活動を進めてまいります。

（宮川 展夫）